「引越しと殺人事件」（二〇〇七年八月書きおろし）

引越しと殺人事件

福沢正男

二〇〇一年の初頭、五十年暮らした生家（借家）が老朽化で取り壊されるのを機に、初めて引越しというものを経験した。

これまで住んでいたのはN市内の県道沿いに建つ四軒長屋の東端で、やもめ暮らしだった隣の麻雀屋のおばあさんが亡くなったので、大家さんから建て替えの話が出た。ところがもうひとつ隣の喫茶店のママさんが「悪いけどわたしんとこはもうここ出るわ」ということになり、西端はすでに空家だったことからこの長屋に残るのはうちだけになった。大家さんは最初建て替えたあとのどこかに入ってもらってもよいようなことを言っていたのだが、途中で気が変わったらしく、とにかく空けて欲しいの一点張りとなった。結局五十万円もらって退去することになった。

私の家族はすでに両親はなく、結婚して三〇年になる妻と、知的障害があるためずっと同居している私の妹の三人だけで、子供もいないので身軽といえば身軽だったが、私にとって生家を出るのはとても勇気のいることだった。中学を出て就職したときに一年ちょっと住み込みの経験があるだけで、それ以外にはずっとここで過ごしてきたのだ。追い出されるようなみじめな心持にもなっていたのだが、何度目かの大家さんとの話し合いの時に、大家さん（の奥さん）が「男なんだからどこ行ったってやっていかなきゃ」と言ったのが腹立たしいながらも「それもそうだ」と思わされたことである。

まあ、決めたからには行き先を探すのだが、何となく最初から市営住宅と決めていた。まずこういうことについて相談に乗ってくれる役所に行ってみると、市営住宅には緊急に住むところの必要な人たちのための枠があるという。それを聞いて一安心したが、そのかわり地理的には希望どおりというわけにはいけない。

とりあえず入ることになった市営住宅はそんなふうに決まった所で、とにかくひとまず落ち着いて、それからまた考えようというつもりだった。このときの引っ越しは近所の幼馴染や古くからの友人たちが手伝ってくれた。石材業をしている友人はクレーンの付いたトラックを貸してくれ、家財の運び出しから運転までやってくれた。もともとせまい家なので大した荷物はないが、それでも人手がなかったら何もできないことは明らかだ。おかげで大家さんからもらったお金はほとんど使わずに済んだ。

ちょっと話が逸れるが、私の家はとにかく貧乏で、私も妹も大学どころか高校にも進学できなかったし、成人式にも行かなかった（私の場合は会社を休んで映画を観に行ったのだが）。私の結婚式は当時（昭和四〇年代）流行りの会費制で、それもすべてといってよいが、友人たちが取り回してくれたものだ。

今回の引っ越しも例外ではなかった。こうして人生初めての引っ越しは無事に済んだ。

さて、新しい住居は築三十年ほどの五階建て市営住宅の一階で、六畳が二間、二畳、台所風呂トイレ、それに増築された八畳間！の「4K」ともいえるけっこうな広さでる。これまでの長屋暮らしよりはずいぶんゆったりしている。

この新居がいい所ならそのまま住んでもよかったのだが、それから二年半暮らしてみて、いわゆる近所付き合いの難しさと大切さを痛感した。結局そこを出てしまった主な理由は、われわれの居た住棟の

ボス的存在である人に睨まれたからだった。新参者はとかくうさんくさく見られやすいものなのに、集会などもよくさぼったし、飼育が禁止されている猫を三匹も飼ったり（前の家からそのまま連れてきたのだ）、一泊旅行で留守をしたときに洗濯機の水道栓が抜けて（元栓を閉めてなかったので）近所を水浸しにしたりした。で、そのボス（といっても私よりはずっと若い（デブの）奥さんなのだが）からお説教されりした。それはまあ仕方がないのだが、とどめは年度替りの最後の棟掃除のとき、ついでに次年度の棟役員を決める選挙があったが、それもつい朝寝をしてすっぽかしてしまったのだ。あとで隣の住人から「来年度はお宅のところになりましたよ」と言われ、何事かと思ったら四月から組長だという。ここの棟では、役員選挙のときにそこにいなかった人が（バツとして？）選ばれるという「慣例」があるそうで、これを聞いて私のハラが決まった。

早く落ち着いて生活の練り直しをしたかったので本当はもう引っ越しはしたくなかった。しかし、自分の失態もさることながら、こんな慣例がまかり通っているようなところでは先がおもいやられるし、それを改革しようにもあのボスと対決するのは絶対ムリ、そんな甲斐もないだろう。友人もいないことだし、未練はまったくなかった。

妻も賛成だった。彼女はそれから実際に引っ越すまでの半年間さんざんボスに「組長」としてこき使われながらも、一方では面白そうに次の引越し先を探した。あちこちの市営住宅の間取り図とかを見比べては感想を言っていた。私はすでに今パートで働いている会社の近くに引っ越す腹づもりでいたのだが、彼女に付き合ってクルマで「下見」と称して一家で団地巡りをした。これがけっこう楽しかった。「今日は△△区の○○荘へ行くぞ！」「お～！」などと、まるで行楽である（ここN市の市営住宅はすべて「～荘」という名が付いている）。

幸いといってはなんだが、私と同居している妹が障害者であることで市営住宅の「優先枠」が利用でき、けっこうすんなり行く先が決まった。引越すことは棟の人たちにはわざと内緒にしていた。当日、引越会社のトラックがやってきて、ボスや近所の人たちのいぶかしげな視線の中でせっせと荷物を運び出した。その当日も、うちの奥さんはボスから「三階の××さんとこの件、お願いですよ」と念を押されていたのだ。その件とは、××さん宅で飼っていたという亀が死んでそれをそのままベランダに放置していたので悪臭が蔓延し、近所から何とかしろと苦情がでていたのだ。しかも××さん宅の子どもが「たいへんな不良」とかで、ちょっと何か言うと激しい剣幕で食って掛かってくるのだという。その尻を持ち込んできていたのだ。妻はどうしようと悩んでいたが、私は、どうせここを出て行くのだからほっとけばいいさ、と取り合わなかった。それでも引越しの間際まで区役所のナントカ課に電話したりしてそれなりに責務を果たそうとしていた（たんなるパフォーマンスだと思うが）。とうとう出発の時間になり、ボスに向かって「あの、引っ越すことになりましたので。いろいろお世話になりました」とこれまでの鬱憤を晴らすべく捨て台詞を残してさっさと引っ越してきたわけである。ざまあみろ。イタチの最後っぺ。あとは野となれヤマトナデシコだ（ちょっとは反省もしているが）。

そういうわけで、新たに引っ越してきた団地ではその教訓もあってできるだけ近所付き合いを大切にしようと思った。その思いが天に通じたか、はじめに挨拶に行った団地の自治会長さん（M田さんという）がいかにも親切な人で、「いやあ、若い人が来てくださって嬉しいですわ」とお世辞をいう（私は55歳）。また、荷物を新居に運んでいるときにも、老婦人が「お引越しですか。よろしくね。わたし、四階の△△H中っていうの。古いだけでなんのお役にも立てないけれどわからないことがあったら遠慮なく聞いてくださいね」と向こうから声をかけてくれた。なんとなくいい所に越してきたかなという気がした。

私の本職は学習塾の講師だったが、二度の引越しと生徒の卒業でほぼ開店休業状態となり、今はパー

トでパソコンの仕事をしていた。その会社が今度の団地からはぐっと近くなった（妻も引越しの翌日面接に行った近所のスーパでパートとして働くことが決まった）。引越しの夜、ベランダからみた中秋の名月がひときわ美しかった。こうしてわれわれの新しい生活が始まったのだ。

二

最初のうちはとにかく愛想よく、会う人ごとに笑顔で挨拶して、立ち話などもできるだけ付き合うというかこちらから仕掛けていくようにした。私たちの部屋のすぐ前がエレベータホールになっていて、団地の住人にはよく会うのでこれは大事なことだった。もうひとつ心掛けたのは、ゴミを拾うことだった。あまり目立つようにはしなかったつもりだが、空き缶や紙屑などを回収して我が家のゴミとして処理する。

こんなことまでして嫌われないようにしようと思ったのは、もうここに居辛くなったら行くところがなくなるからだ。私たちの家族はとても一戸建てを買うことなどできなかった。市営住宅をある意味終（ツイ）の棲家と考えていた。全国的には知らないが、このN市の市営住宅は、比較的高齢者が多く、近所付き合いがかなり濃い。団地が平屋建てだった昔から居る人たちは近所付き合いを大切にしているし、決め事とか慣例とかをとても重要視している。だから団地ではそれを無視しては毎日を安穏に暮らせないのだ。

もちろんそうでない人もいる。すぐわかったことだが、我が家の隣の住人のS木さんという人などはもう5年以上自治会費を払わず、ここの誰とも付き合いがない。私より一回りほど若い人だが、うわさでは「ヤクザかなにか」で、みんな怖がって挨拶もしない。妻と二人で引越しの挨拶にいったときはそんな感じは受けなかったが、うわさとは怖いもので私たちもなんとなく敬遠するようになった。

しかし、他の人たちはみなほんとにいい人ばかりだった。自治会長のM田さんなどは役目柄よく団地内を見回っていたが、どこで会っても必ず「やあ、どうですか、もう慣れましたか」ときさくに声をかけてくれるし、4階のH中さんも買い物の帰りにわざわざ「ピンポ～ン」と寄って「これ、みかん。食べて」と差し入れしてくれる。あるいはまた、駐車場がお向かい同士で、出かける時間が同じなのかよく会う女の人が話しかけてくれる。品のいい奥さまといった感じだが、保険の外交員とのこと。それで愛想もいいのだろうが、別に保険を勧めてくるわけではない。あとでわかったが、その人はここの（その年度の）女性会の役員さんで、K頭さんといった。

引越しからまだ一週間も立たないとき、会長さんが改まって、「あのですね、実はここでは毎年秋季祭礼といって町内のお祭りをやるんですが、それが今度の日曜日でして、ぜひ来ていただきたい」と誘いにみえた。大体の話では、毎年一0月の初め、この学区全体がひとつになってやるお祭りで、子ども会が獅子やおみこしで町内を周遊し、お菓子を振舞われる。一般の大人たちも夜はお神酒で楽しく歓談ということらしい。それを団地の集会場でやるから来いというわけだ。正直あまり気はすすまないのだが、当初の方針「近所付き合いを大切に」を実行すべくありがたく出さして戴くことにした。

当日の日曜日、5時からとのことだったが、新参者として遠慮のつもりで5時半ごろ集会所（別の棟の一階の隅にある）にお邪魔した。ここが獅子回りの「お宿」になっているのだ。団地の中庭に面した戸をすべて開け放していたので外からも丸見え。もっともこの日は6棟ある団地のすべての棟で同じように文字通りのお祭り騒ぎをやっていた。正面奥に三段の棚を作り、一番上に獅子頭を二つ置き、二段目には熨斗紙を巻いた野菜を三宝に乗せ、瓶子のお神酒を飾っていた。昔の収穫祭の名残なのかもしれない。その前に長い机を並べ座布団を敷いて三0人くらいの人が集っている。歓談する人、踊っている

のか歌っているのかわからない人、にぎやかである。幹事さんのような人が「よくきてくれましたね、さ、奥へ」と案内してくれる。奥の席に会長さんもいたが、すでに顔が真っ赤だ。いわゆる出来上がっている状態。軽く挨拶すると思いっきり手を振ってくれた。適当に座ると隣の人が「ま、ま、一杯」と注いでくれる。寿司やおでんを振舞われる。隣の老人（失礼）が何か話しかけてくるのだが、内容がよくわからない。どうも誰かと間違えているのではないかと思った。さりげなく、今月越してきたばかりの者で、と言うと、「あははは」と大笑してまた注いでくれるのだ。打ち解けるというのとはちょっと違うかもしれないが、確かにこういう集いには参加しておくべきかも知れない。

立っていそいそと世話を焼いている何人かの人は、どうも女性会の人らしい。あとで知ったが、この集まりの幹事さんは自治会役員、各階の組長さん、女性会、そして子ども会の役員さんたちであった。集まってくるのはお年寄りが多い。若いひとは極端に少ない。一０代はひとりもいない、二０代はいるだろうか。３０代はたぶん若い奥さんで役員になった人だろう。それ以外ほとんどが６０歳以上か、と思える。役員さんに女性が多いのは、たぶん旦那が奥さんに役員を任せているからだろう、と容易に想像がつく（自分もできたらそうしたいから）。

三

引越しして半年くらい経った5月半ば、団地のすぐ近くで殺人事件があった。

団地とは道をはさんで面している一軒の住宅で五十歳くらいの奥さんが刺殺され、お金を盗まれたというのだ。その日私は、家業の学習塾を終え、クルマで帰って来て事件を知った。夜の9時ごろである。団地の駐車場に入るまでに5台くらいの緊急時仕様（赤色灯が回転している）のパトカーを見たし、ちょっと様子を見に行くと（50ｍと離れていなかった）野次馬と警官とで大騒ぎだった。野次馬の話から殺人事件とわかり、ぞっとした。

テレビや新聞で殺人事件のことを知ってもあまり驚かないが、自分の家の近所となると別だ。本当にぞーっとするのだ。まだ犯人が血のついた包丁を持ってその辺にうずくまっているような気がした。怖いものだ。

家に入ると、先に帰っていた妻が知っている限りの情報を伝えてくれた。事件が起きたのはこの日の夕方。殺された奥さんは妻が働いているスーパにもよく来ていたらしい。愛想のいい人で、恨みをかうようなことはないのではないか（そんなことはわからないが）。初めから金目当ての強盗が殺してしまったらしい…。

そんなことを聞いているうちに我が家にも警察がやってきた。といってもいわゆる巡査や刑事のスタイルではなく、テレビで見る鑑識課のような制服で、何か気づいたことはないか、怪しい人やクルマを見かけなかったか等を聞いていった。聞き込みだろうか。たまたま聴いたラジオのニュースでは「15日が給料日と知っているなど、内部の事情に詳しいものの犯行か」などと言っていたのですぐ捕まるかと思っていたが、それからもう四年になる現在（07年7月）でも事件は解決していない。事件のあった家はその後何事もなかったように仕事を続けている。

ところがさらに、それから2年後の2005年三月2三日、こんどは団地内のおばあさんが殺される事件が起こり、このときは地域の民生委員をしている人が強盗殺人容疑で逮捕された。

この事件は「民生委員の犯罪」という点がクローズアップされ、テレビのワイドショーで派手に放送された。その民生委員さんもばっちり顔を撮られ（隠し撮りだが）何度も放映されていた。私はその顔

に見覚えがあった。名前もすっかり有名になってしまったが、ここでは仮にAさんとしよう。

この前年四月、私は引越し2年目にもかかわらず自治会の会長に選出されていた（任期は1年）。慣れない場所での慣れない活動に、実に大変な1年を送った。月一回の学区全体での自治会・町内会の寄り合いに出ると、そこに必ずAさんも来ていた。だからテレビでAさんの顔を見たとき、ああ、あの人かと思った。しかし本当に驚いたのは、Aさんがもっと直接自分に関わりがあると知ったときだった。

今度の事件では警察の聞き込みはなく、そのかわり一般のマスコミが大勢やってくるようになった。テレビカメラの一団がしばらくの間、団地のあちこちをうろついているのが見られた。そしてとうとう我が家にもやってくるようになった。最初は某国営放送の若い放送記者が一人でやってきた。ところが彼は殺されたおばあさんについてではなく、私のいるこの棟で病死したある男性とAさんとの関連について聞きたいということで、年度替りで新たに選出された自治会長さんから私のことを聞いてやってきたのである。このことはまだ他社は知らないから内緒にしてほしいと彼は言っていた。

私は訝しく思いながらも話し出した。「病死したある男性」を仮にBさんとする。私の会長任期もあと数日という三月26日夕方8時ごろ、一組の男女がうちを訪ねて来た（そのとき確かに名乗っていたはずだが、私は覚えていない）。その女性は「最近Bさんと連絡が取れない。様子が変だから一緒にきて欲しい」という。そこまで話した時、記者は「それがAさんですね」と聞いた。ああ、そうだったのか、その女性こそAさんだったのだと、私は改めて思い当たったのだ。以下ではAさんとして記述するが、その時にはまったく意識していない。

Bさんの部屋まで行く途中、Aさんは「ベランダに洗濯物がなん日もそのままになっている。そんな人ではないのに」とか「最近怪しい人がよく来るので困ると言ってた」などという話をした。それがなんとなく自治会長の怠慢への非難に聞こえた。実は私はBさんからこれまで電話で何度かある依頼を受けていたのだ。独居老人をねらった悪質なセールスに注意するよう回覧板を回せというような内容だった。その時一度お邪魔して話をしたのだが、玄関の錠前も二重になっており、訪問者がすぐわかる監視カメラも付いていた。

Aさんの部屋に着いてみると、部屋の明かりは点いていた。しかし何度呼んでも返事はない。しかもドアノブを回すと施錠されていない。ますます嫌な予感がした。仕方なくちょっとドアを開けてみると、玄関にも明かりが点いていて数日分の新聞の束が玄関に溜まっているのが見えた。これは非常事態だと判断、中には入らずすぐ警察に連絡しようと思った。ところがAさんとその連れの男の人は中に入り、玄関のすぐ横の部屋をのぞくようにして、男の人が「ああ、だめだ。亡くなっている」とつぶやいたのが聞こえた。Aさんがそれに何と答えたかはわからなかった。私はとにかく現場を保全しなくてはという気持ちから、「警察に連絡しますから一旦引き上げましょう」と自宅まで戻り、固定電話の子機を持って出てくると、Aさんは名古屋北警察署の電話番号をすらすら教えてくれた。その通り電話して事情を伝え、警察の来るのを待った…

単純に見れば、Aさん達と私はBさんの遺体の第1発見者である（私は遺体を見ていないが）。だが、もしAさんがBさんの死について責任があれば、なぜ私を誘って遺体の発見者になるようなことをしたのか。アリバイ工作としては意味を成さないし、民生委員としての体面を繕うにしては危険だ。「第1発見者」など真っ先に疑われるからだ。

ここまで話すと、記者は「今のお話、録音させてもらってもいいですか？」と聞いた。私は事の重大性に尻込みし、それを拒否した。Aさんはすでに容疑者であり、マスコミではすっかり犯人に仕立てられている。自分の証言がAさんへの疑惑をますますエスカレートさせるために使われるのはわかりきっていた。

それから2〜三ヶ月は我が家にも入れ替わり立ち代りいろいろなマスコミがやってきたが、すべて門前払いにした。ある程度でも話したのは例の某国営放送だけだ。ことわっておくが、後日警察がその件で事情聴取に来たときには（その時は刑事さんだった）、もちろんすべてお話した。これは市民の義務である。ちょっとおかしかったのは、刑事さんが「すみませんが中に入れてもらっていいですか。マスコミの連中に見られたくないので」とお願いしてきたことだ。警察も大変である。

Aさんは、その後窃盗罪でその年の7月に起訴された。さらに翌8月、強盗殺人容疑で再逮捕された。しかし、マスコミはなぜかその後急速におとなしくなった…。